

第19回『浮世絵①』

～埋め立てによる江戸大都市計画



江戸後期に描かれた、歌川広重画『江都(戸)勝景』より「日比谷外之図」。元々日比谷以南は東京湾の入江、つまり海だったが、江戸幕府が開かれる前後に家康の命により埋め立てられたとされる。この江戸後期の絵からも海の面影は感じられず、すっかり“町”の風貌だ。なお『江都勝景』は江戸市中の大名屋敷を描いたシリーズとされ、立ち並ぶ家々は当時の大名屋敷だと推定されている。
(所蔵:国立国会図書館)

江戸時代に成立し、日本を代表する芸術作品である浮世絵。浮世絵の祖とされる菱川師宣をはじめ、葛飾北斎、東洲斎写楽、歌川広重など名立たる浮世絵師が登場し、世界に日本のアートを誇示した。浮世絵には人物や風景など様々なモチーフが登場しているが、なかには土木に関係する施設や土地の特徴が描かれているものがある。これらを紹介しながら現在の東京が形づくられるに至った歴史を紐解いていく。

日比谷入江の埋め立て

世界に誇る巨大都市へと進化した首都・東京。その歴史は、徳川家康が江戸に入った1590年にさかのぼる。家康は、海を埋め立てて領地を拡大し、水路網の確立や港湾機能の強化など都市計画を遂行しながら日本屈指の巨大都市を築き上げた。特に家康が名を上げたのが埋め立てによる領地拡大だ。経済の急成長に伴う人口増加に対応するため、江戸湊を埋め立てて武家屋敷をつくった。

関東移封（秀吉が家康に命じた関東への国替え）により、豊臣秀吉政権下における関東の領主となった家康。この頃の江戸は、海に面していることもあり漁業が盛んであるほか、安房や常陸など関東から特産品が集まり往来人でにぎわっていた。だが低湿地であり水質も良くなく、戦国時代に城下町として栄えた小田原や家康の出身地である三河とは程遠く、「都市」と呼べるものではなかった。

家康は、江戸に入るやいなやインフラ整備と江戸城の拡充、城下町の造成に乗り出す。特に城下町の造成に尽力したという。江戸城が太田道灌によって築かれたのは

1457年。それから100年余り、家康が江戸に来た当時の城下町は、大手門の外側に茅葺きの家が100戸並ぶ程度で、現在の日比谷交差点あたりから南に江戸湾が入り込んでいた。そこで、家康は家臣に対し堅堀、横堀を開いて、排水と通船の便を図り、さらに高台の土を掘り崩して沼沢地を埋め立て、そこに町地と武家地の地割を行うよう



千代田区有楽町1丁目にある日比谷交差点から北側を望む。「日比谷入江」の名残であると言われる現在の日比谷濠（ひびやぼり）が広がる。

人のために豊かさや便利さを提供する土木を、生活のなかに浸透させていくこと。
「DOBOKU×カルチャー」では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、そんなコンテンツを紹介します。

命じたという。江戸という地で大都市がつくれるか。家康の命運がかかった一大工事は、大名も動員され、夜を徹して連日行われるなど大掛かりなものであった。

城下町をつくるにも城を拡充するにも、まずは広い平地が必要だ。そこで目をつけたのが日比谷入江だった。元々は、海苔養殖の中心のまちで、地名は海苔養殖用のひび（篠竹や木を海中にさしたもの）が多く見られたことに由来するそうだ。道灌の時代から多くの人でにぎわいを見せていたエリアだった日比谷入江を、江戸城改築の際の堀からの揚げ土で埋め立てたという。その時期については様々な説があるが、家康が幕府を開く前という説が

最も知られている。家康は、征夷大將軍になる前からこの江戸という地で天下を取り、日本一の大都市に成長させるというイメージをもっていたのだろう。

諸大名の屋敷地とする以外にも、日比谷入江を埋め立てたのには別な目的があったともいわれている。それは、当時の大量輸送手段である「水運」の基地を確保するためであり、外国船が入ってくるのを防ぐためである。

経済、防衛の点でも江戸の地が優れていると確信していた家康。日比谷入江の東岸部は豪として残されたが、現在の皇居外苑や日比谷公園、内幸町、新橋の範囲が陸地化され国の要所となった。

孤島から陸続きになった佃島

江戸時代の古地図を開いてみると江戸湊にぽつんと点のような島が見て取れる。これが佃島である。現在は、月島、豊洲、晴海など橋を通じて陸続きになり、島という印象は薄くなっているが、江戸の頃に漁師たちの手でつくられた人工島である。

かつては向島と呼ばれた佃島の歴史は、家康の命を受けた摂州国（現在の大阪府と兵庫県にまたがる地域で五畿内の一つ）の佃村・大和田村の漁師たちがこの地にやって来たことから始まる。家康が摂津国で川を渡る際に困っていたところ、佃村の村民が舟を出したことが江戸に呼ぶきっかけだといわれている。また、江戸に比べ関西の漁猟法が進んでいたこともあり、江戸湾の魚類の確保をするために呼ばれたともいわれている。1613年、幕府御用掛として江戸湾付近での自由漁業が許可されたことから、家康から目をかけられていたことがうかがえる。

漁民たちは当初、小石川に住んで、漁のために島へ赴いて

いたが、武家地への町人の居住が禁止されたことをきっかけに築島を計画。隅田川の海中に点在する小さな干潟だった島を、漁師たちが住むことのできる人工島へと10年以上の年月をかけて進化させた。元々2~4mの浅瀬が多く埋め立てしやすい江戸湊だったが、漁師たちは漁の合間に土木工事を行うなど、休みなく埋め立てを行った。1644年に島が完成すると、故郷の佃村の名から「佃島」と名付けられ、移住後には住吉神社の社殿も作られた。3年に1度の例大祭は伝統行事として今も続けられ、江戸の様式を後世に伝えている。

明治時代になると、島から陸続きへの変遷が始まる。東京府の東京湾整備事業を機に、明治から昭和にかけて佃島周辺の拡張が進む。月島、新佃島、勝どき、晴海、豊海と埋め立てが一気に進んだ。このプロジェクトを請け負ったのが日本土木会社（のちの大倉組、現在の大成建設）。埋め立てが進むにつれ、橋を通じて大きな陸地が形成され

た。昭和から平成にかけてはタワーマンションが林立し、人口も急激に増えるなど都心のウォーターフロントとして人気を集めた。現在は、江戸の香りが残る佃煮屋とタワーマンション群が共存するフォトジェニックなまちとしても知られている。



1831~34(天保2~5)年に版行された、葛飾北斎画『富嶽三十六景』より「武陽佃島」(武陽とは江戸の異称)。佃島の隣には、浅瀬で隔てられた別の島である石川島があったが、この絵が描かれた江戸後期にはその浅瀬は埋め立てられ、佃島と石川島は一体の島となった。中央に描かれている島の右手は佃島、左手の森のようなところは石川島である。荷物や人を運んだ舟が数多く往来する活気のある島だったことがわかる。(所蔵:国立国会図書館)



1861~64年頃に発行された「江戸切絵図」より「築地八町堀日本橋南絵図」の佃島周辺。この時期、石川島と佃島はすでにつながっていたことがわかる。なお、右上の白色部分は深川。(所蔵:国立国会図書館)



1831年(天保2年)頃、歌川広重作『東都名所』より「洲崎弁財天境内全図 同海浜汐干之図」。1700(元禄13)年、5代將軍綱吉により建立された洲崎弁財天(現在の洲崎神社)が左に描かれている。この付近は埋め立て地で、弁天社は海岸に面した土手の先端の位置にあった。1791(寛政3)年、深川・洲崎一帯に襲来した高潮により極めて重大な被害が出たため、幕府は弁天社の西側一帯を買い上げて空地にしたというが、これは絵の中央から奥に伸びる青緑色で塗られた箇所と推測される。また空地の両端には波除碑(なみよけひ)を一基ずつ設置したという。絵の中でも、弁天社の門の前には波除碑が描かれている。(所蔵:国立国会図書館)

移転を繰り返し、たどり着いた江東区木場(洲崎)

家康が江戸城修復や市街地造成を推し進めていくうえで必要されたのが多くの木材だった。全国各地から大型船で木材が運ばれてきたため、当初は日本橋や神田などの川沿いで材木屋が急増。多くの材木商人が富を築いた。

しかし、1641年に江戸の下町一帯2000戸を焼く大火事が起きると風向きは一変する。大火の原因の一つとして市中の材木屋が槍玉に上げられてしまい、材木屋はここから数奇な運命をたどる。幕府から移転地として示されたのが隅田川東岸にある永代島だったという。現在の江東区の佐賀町にあった永代島は当時、人家もなければ橋もない地だった。その地が材木置場として指定された。のちに「元木場」といわれる場所である。

当時は、材木置場として材木商人が通って作業をしていたが、1657年の振袖火事を受けて避難経路としての橋や道が整備されると、店舗を構える木材商人も増え、活気が



1992年に開園した緑豊かな憩いの場・都立木場公園。元々は材木の貯木場であったということを残すために、公園の中央付近にはプールのような「イベント池」がつくられた。ここでは毎年10月に木場の伝統芸である「木場の角乗」が行われている。なお、写真奥に見えるのは、公園のシンボルの木場公園大橋。

生まれた。しかし、その地も1699年に幕府の御用地となることで終焉を迎える。その代替地として命じられたのが、これまで使っていた材木置場から東に進んだ猿江付近。1701年、猿江の材木置場の業者はその地を返上し、代地として今の旧木場町あたりの土地約9万坪の払い下げを受け、自力で埋め立て、掘割を行うなど造成を進めた。そして木場町が成立した。

移転を命じられ埋め立てを繰り返し、広大な土地を手に入れてきた材木商人たちだったが、その一方で水路の確保が次第に厳しくなり、昭和に入ると東京湾の新木場1～3丁目に移転した。

では、木場の跡地はどうなったのだろうか。現在は、都立木場公園として多くの人の憩いの場となっている。今でも毎年10月に、水辺に浮かべた材木を、鳶口ひとつで乗りこなして筏に組む「木場の角乗」という伝統行事が行われている(2021年は中止)。東京都指定無形民俗文化財として指定されている。

埋め立てにより経済が活発になり、人口が増える。かくして日本の中の江戸が世界の東京へと発展していった。

〔参考文献〕大石学「首都江戸の誕生 大江戸はいかにして造られたのか」角川選書、2002年／タイモン・スクリーチ「江戸の大普請 徳川都市計画の詩学」講談社、2007年／鈴木理生「江戸の都市計画 都市のジャーナリズム」三省堂、1988年／谷口榮「都市計画家(アーバンプランナー) 徳川家康」Mdn新書、2021年／童門冬二「江戸の都市計画」文藝春秋、1999年／鈴木理生「江戸はこうして造られた 幻の百年を復原する」ちくま学芸文庫、2000年／秋永芳郎「江戸東京 木場の歴史」新人物往来社、1975年／松本善治郎「江戸・東京 木場の今昔」日本林業調査会、1986年／東京都「佃島と白魚漁業」、1978年／佐原六郎「佃島の今昔=佃島の社会と文化=」雪華社、1972年／月島地区一〇〇周年実行委員会「月島百年史」、1993年